SDGsの17目標

1 貧困をなくそう　2 飢餓をゼロに　3 すべての人に健康と福祉を　4 質の高い教育をみんなに　5 ジェンダー平等を実現しよう　6 安全な水とトイレを世界中に　7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに　8 働きがいも経済成長も　9 産業と技術革新の基盤をつくろう　10 人や国の不平等をなくそう　11 住み続けられるまちづくりを　12 つくる責任 つかう責任　13 気候変動に具体的な対策を　14 海の豊かさを守ろう　15 陸の豊かさも守ろう　16 平和と公正をすべての人に　17 パートナーシップで目標を達成しよう

2030 SDGsで変える

若者がつないだ 日常と目標

SDGs（エスディージーズ）（持続可能な開発目標）にはターゲットと呼ばれる小目標がありますが、あまり知られていません。このほどターゲットにわかりやすいコピーをつけるプロジェクトが完成。土台になったのは、若者から寄せられた2万3千を超えるアイデアでした。（編集委員・北郷美由紀）

アイデア2万3千超 踏み出す一歩

SDGsターゲットの日本語コピーの完成発表会。出前授業で出会った青山学院と大和証券グループ、慶応義塾と住友林業、和洋九段女子とマニフレックスの関係者も再会した＝3月26日、横浜市内

SDGsは17分野の目標を達成する具体的な行動として、目標ごとにターゲットを定めている。チェックリストの役割も果たす重要なものだが、全部で169もあり言い回しも難しいことから、ターゲットに沿った取り組みは広がっていない。

そこで慶応大の蟹江憲史教授らの発案で2020年5月に始まったのが、「SDGs169ターゲットアイコン 日本版制作プロジェクト」だった。生徒や学生からターゲット用のコピーを募集。11月末の締め切りまでに2万3382通のアイデアが寄せられた。プロのコピーライターも入った制作委員会が集まったアイデアを整え、完成版が3月にできた。

大阪府立阿倍野高校では昨年度の探究学習でSDGsに取り組んだ新3年生の多くが、自作のコピーを送った。村上典子さんは、誰でも公共スペースを同じように利用できるようにする目標11の7番ターゲットに、「差別のかわりに安心と笑顔あふれるみんなの場所を」というコピーを考えた。空き地が減って残念に思う気持ちや、未来がそうなっていてほしいとの期待を込めた。完成版のコピーは「すべての人に、安心して利用できる緑地や公共スペースを」。これを見た村上さんは「具体的でわかりやすい。こういうコピーがあれば、大事なことを意識しやすくなる」

完成版で井上麻衣さんが注目したのは目標5の4番「家事や育児を労働とみなし、家族で、社会全体で分担しよう」だ。自分の家でも友人宅でも共働き家庭のお弁当の作り手が母親なのが気になっている。日頃のもやもやと世界の目標が結びついた。

東京都千代田区の和洋九段女子中学校高等学校では昨秋、プロジェクトのメンバーと協力企業による出前授業が行われた。約150人の希望者が目標12の「つくる責任 つかう責任」を考えた。高1（当時）からも大勢が参加。長屋こと乃さんは「日常生活でSDGsに関係していることをさがしていくきっかけになった」と振り返る。

コピーづくりではコンシニエ優菜さんと高橋花音さんらが廃棄物を減らすターゲット用に考えた「かんがえる きょうも未来の環境を」が生徒の間で注目を集めた。五七五調で覚えやすくした工夫が光った。

三つのターゲットのコピーを考えて送ったのは戸嶋みさとさん。「どうすれば行動を起こせるか悩んでいたけれど、コピーを考えることでやっと一歩踏み出すことができたと思う」。完成版の発表を心待ちにしていたのは小林華果さん。オリジナルのすごろくを作ってSDGsを広める活動をしている。「変化のスピードが遅くてもどかしい。私たちが『意識が高い』と言われてしまううちは世界は変わらない」と話す。

169項目のターゲット 日本語コピーが完成

SDGsターゲット こんなにわかりやすくなった

TARGET 1-2
どこの、どんな貧困も、半分に減らそう
（外務省の仮訳）2030年までに、各国定義によるあらゆる次元の貧困状態にある、すべての年齢の男性、女性、子どもの割合を半減させる

TARGET 2-1
誰もが毎日、安全で栄養のあるものを食べられる社会に
2030年までに、飢餓を撲滅し、すべての人々、特に貧困層及び幼児を含む脆弱な立場にある人々が一年中安全かつ栄養のある食料を十分得られるようにする

TARGET 5-1
全世界の、あらゆる形の女性差別に終止符を
あらゆる場所におけるすべての女性及び女児に対するあらゆる形態の差別を撤廃する

TARGET 8-5
すべての人に、働く喜びと正当な対価を
2030年までに、若者や障害者を含むすべての男性及び女性の、完全かつ生産的な雇用及び働きがいのある人間らしい仕事、ならびに同一労働同一賃金を達成する

TARGET 10-5
お金のズルを、世界中で厳しく取り締まろう
世界金融市場と金融機関に対する規制とモニタリングを改善し、こうした規制の実施を強化する

TARGET 14-1
海へ流れるゴミを減らし、これ以上の海洋汚染を防ごう
2025年までに、海洋堆積物や富栄養化を含む、特に陸上活動による汚染など、あらゆる種類の海洋汚染を防止し、大幅に削減する

完成発表会「身近なことから」「使い捨てなくす」

コピーの完成を受けて3月26日、横浜市内で発表会が開かれた。出前授業が行われた3校の代表も集まり、SDGsのために取り組むことを宣言した。

青山学院中等部（東京都渋谷区）3年の石原弘さんは「油汚れをふいて食器を洗うなどして節水につとめる。身近なことから意識すれば、誰でもできる」。慶応義塾中等部（同港区）3年の松本士昂（しゅう）さんは「学校が保有する森林を使って森と街の間に循環を作ることを考えたい」。和洋九段女子高校1年の陶楽舟（ととふね）さんは「使い捨ての習慣をなくす。譲り合いなどで製品のライフサイクルを延ばしていきたい」と述べた。

寄せられたコピーについて蟹江教授は「若い人たちの想像力に感心する。複雑な文章を読み込むことでなぜこんな目標や言葉があるのかを考えるきっかけとなり、SDGsの本質に近づいたのだと思う」。17目標の日本語コピーの作成にかかわり、今回のプロジェクトにも加わった博報堂クリエイティブディレクターの井口雄大さんは「こどもたちから大人に広がっていくことを実感した」と話す。

◇

コピーは「朝日新聞 169ターゲット」で検索でき、誰でも使うことができます。

SDGsを学べる本 先着200校に無料で

持続可能な社会づくりに動く先生と生徒を応援するプロジェクト「SDGs for School」が、学びに役立つ本を先着200校に届けている。国内外のSDGsにつながる取り組みをデータとともに紹介した「未来を変える目標 SDGsアイデアブック」で、1クラス分の40冊が無料で提供される。

応募はプロジェクトのWEBサイトから。「SDGs for School」で検索。現場の教師とともにこのプロジェクトを運営する「Think the Earth」（東京都渋谷区）では今月下旬からオンラインで大人と子供が学び合う「未来を変える学校」も始める。参加は無料。

環境にやさしいプラ 製法も「使った後」も

わが・まさゆき　東京都出身。慶大卒。1981年三菱化成工業（現三菱ケミカル）入社、石油化学部門が長く、2018年4月から社長。20年7月から石油化学工業協会長。63歳。

三菱ケミカル 和賀昌之社長

化学大手の三菱ケミカルは、石油からつくるプラスチック原料を主力としています。「脱炭素」や「脱プラスチック」の流れが強まる中で、石油化学事業の今後を、どのように考えているのでしょうか。和賀昌之社長に聞きました。

――昨年秋、菅義偉首相が「温室効果ガスの排出を、2050年に実質ゼロにする」と表明しました。どのように対応しますか。

プラスチック製品は生活に根付いており、これからも求められるものは作っていきます。ただ、その作り方を考えなければいけない時期に来ています。

石油でも天然ガスでも、「分解する」という手法が良くありません。分解の過程で、様々な化学品ができてしまい、処理しきれないものもでてくる。その一つが二酸化炭素（CO_2）なのです。

――作り方を変える技術には、どのようなものがありますか。

たとえば、植物を原料にしたプラスチック。すでに販売を始めており、自動車部品などに使われていますが、年間数十億円の売り上げがあります。また、工場などから出たCO_2を逆に回収して、水を太陽光で分解して作ったクリーンな水素と反応させることで、原料を作る製法も開発しています。

また、海洋汚染などの問題を考えれば、プラスチックを「使った後」にも視野を広げる必要があります。そのため、植物を原料に使い、最後は生分解するプラスチック製品も完成しています。こうした、製法も「使った後」も環境にやさしいプラスチックを、さらに広げていきたいと考えています。

――石油から作るのに比べてコストがかかり、収益を圧迫することになりませんか。

仕方がありません。我々が「作り方を再考する」のは、2度目の経験です。昭和40年代には四日市の公害問題などがあり、生産過程での廃棄物や副生物の処理方法が問題になりました。ただ、それを機に、公害防止装置の開発などで海外メーカーに先行できました。

――「2050年に実質ゼロ」に向けて、どのような道筋を描いていますか。

まだ我々は「2050年ゼロ」を宣言していません。宣言するのは簡単ですが、できないことを宣言しても仕方がないからです。何をもって「カーボンニュートラル」というのか、まだ現状は非常にあいまいで、定義を確認しなければいけません。

――他には、どのような課題がありますか。

コストは相当かかるということです。今は石炭火力などで自家発電をしていますが、その方式も変えなければいけません。また、製品の値段が上がらないのに「全く新しい製法で作れ」と言われても厳しい。環境負荷が低いものは価格が高くなると、消費者や国に認識してもらわないといけません。

――環境に負荷をかける炭素の排出量に値段をつける「カーボンプライシング」の仕組みを、社内で導入しようとしています。どのような制度を想定していますか。

部署ごとに、つくる製品の生産から廃棄までの炭素の排出量を計算します。それを、その部署の損益から差し引くことを想定しています。そうすれば、成果を上げても、炭素の排出が多ければ目減りしてしまう。それを排出削減の動機づけにしてもらえたらと考えています。

（聞き手・江口英佑）